

[2014/2015] 九州大学附属図書館研究開発室年報表 紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1523946>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2014/2015, 2015-08. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

平成 26 年度における研究開発

1 情報専門職の育成に関する調査研究

室 員	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	岡崎 敦 (人文科学研究院教授)
担当窓口	郷原 正好 (図書館企画課長)
	久原 明美 (資料整備室長, 図書館専門員)

<研究開発の概要>

図書館職員の専門性および次世代を担う情報専門職の育成をはかるための調査研究を行う。

<研究開発の内容>

- 福岡アメリカンセンターと大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻との共催講演会の開催
 - 平成26年6月11日(水)に、米国大使館情報資料担当官のアルカ・バトゥナガー氏による図書館マーケティングに関する講演会を共催した。図書館職員14名も参加し、米国の大学、公共図書館におけるトレンド分析や、ビジネス、キャリア支援などの実例とその考え方について把握した。
 - 平成26年8月1日(金)に、米国図書館協会(ALA)会長のバーバラ K. ストリプリング氏による講演会「インフォプロと図書館の新たな役割」を共催した。石田室員が司会を務め、図書館職員11名も参加し、地域の学校図書館、公共図書館をはじめ、全ての図書館におけるインフォプロや図書館司書の教育的役割について把握した。
- 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻PTLII成果発表会への参加

平成26年7月23日(水)に、ライブラリーサイエンス専攻の科目「PTL II」の学生成果発表会が開催された。「目録作成における課題の抽出と解決案 ―九州大学文書館資料を事例として―」と題した学生からの発表があり、その後、ライブラリーサイエンス専攻の学生・教員とともに、図書館職員7名も参加し、質疑応答、ディスカッション、意見交換などをおこなった。
- 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻「ライブラリー資料論」における講師

平成26年度後期のライブラリーサイエンス専攻の科目「ライブラリー資料論」において、図書館職員7名が講師として、講義・演習を担当した。内容は、情報の組織化(分類・目録)、電子リソースの管理、機関リポジトリ・九大コレクションの概要と管理、情報検索サービス等であり、学生への教授を通して、業務における専門性を客観的に把握、再確認した。

2 国内外の図書館間連携および新図書館計画に関する調査研究

室 員	吉田 素文 (附属図書館副館長, 医学研究院教授)
	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	堀 賀貴 (人間環境学研究院教授)
	松原 孝俊 (韓国研究センター教授)
職 員	北島 光朗 (情報システム部情報基盤課)
担当窓口	松石 健祐 (図書館企画課企画係長)

<研究開発の概要>

研究・開発分野での大学図書館間の連携をすすめるとともに、新図書館に必要とされる図書館機能と、それを実現するための施設設備・サービスに関する調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 著作権処理に関する大学間連携（吉田）

平成26年5月に設立された「大学学習資源コンソーシアム」のなかの活用ガイドラインWG主査として、他大学との連携のもと検討を行った。（詳細は「教材開発および著作権処理に関する調査研究」に記載）

2. 海外の大学図書館との連携、訪問調査（石田、松原）

イリノイ大学図書館の職員と共著により国際会議用の論文を執筆したほか、海外の大学図書館の機能、施設設備・サービスを把握するため、ワシントン大学図書館、UCLA図書館、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校図書館等への訪問及び調査活動を行った。（石田）

新図書館建設計画を見据え、ハーバード大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校、ソウル大学、延世大学等を訪問し、世界各国の最新の図書館事情の調査を行った。（松原）

3. 新図書館計画の検討・策定（堀）

関係部局教員を委員とする新中央図書館基本計画検討委ワーキンググループ（座長：堀教授）を組織し計6回の検討を行い、新中央図書館基本計画の策定を完了した。平成22年度に新たな図書館のコンセプトづくりからスタートしたワーキンググループの開催回数は計53回を数え、設計のコンセプト、空間構成、諸室の配置から実施設計の細部にわたる調整まで、施設部、設計事務所とも密接に連携しながら計画の策定を行った。

3 マーケティングおよび新サービスの創出に関する調査研究

室員	馬場 謙介（附属図書館研究開発室准教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	藤崎 清孝（システム情報科学研究院准教授）
	伊東 栄典（情報基盤研究開発センター准教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
	南 俊朗（附属図書館研究開発室特別研究員、九州情報大学教授）
	井上 創造（附属図書館研究開発室特別研究員、九州工業大学准教授）
職員	井川友利子（伊都地区図書課企画運営係）
担当窓口	堀 優子（利用支援課サービス企画係長）
	野原ゆかり（伊都地区図書課利用サービス係長）

<研究開発の概要>

利用状況の分析を基にした図書館マーケティングと、それを活用したサービス・利用環境の改善、新たなサービスの創出に関する研究開発を行う。

<研究開発の内容>

1. 貸出データ解析及び授業データ解析（南）

今年度は、貸出データ解析を利用したおよび図書館の選書への適用可能性の研究、そして、図書館データ解析と同様なアプローチによる授業データ解析手法の研究という2つのスタンスによる研究を継続した。これらの研究アプローチは、機関研究（Institutional Research）の一環であると見ることもできる。具体的には以下の通りである。

1) 日本十進分類NDCの300台の社会科学、400台の自然科学を中心にNDC分類番号毎の貸出に関する回転率などを比較した。その結果、たとえば、社会科学系の図書は、研究室に所蔵されていない分類番号の図書を図書館から借りる傾向があるのに対して、自然科学系の図書は研究室に所蔵されている分類番号の図書が図書館でも借りられている傾向が強いことなどが分かった。また、自然科学分野に対して、10の中分類分野における貸出冊数が図書館に登録されてからの経過日数に対する減少割合を調べた結果、10の分野は大きく3つのグループに分かれることなどが見出された。

その他、日本十進分類の小項目分野000～999、に対して、その分野の図書を借りた利用者（主に学生）が借りた図書の主分類分野000～900のいずれの図書を主に借りているかを指標化し、それに基づき、指標値が最も大きい大分野を当該小項目分野の実質所属分野と定めた。その結果、本来の分野と異なる実質分野としては、ほとんどが社会科学300や自然科学400に集中した。さらに、実質分野を用いた学部別の貸出分野割合と本来の分野による割合を比較した結果、割合変化の最小は歯学部であり、最大は工学部であった。

2) 図書館データ解析と同様の解析手法を授業データに適用する研究を継続した。授業の総括コメントを問う学生アンケート回答の解析として、学生が用いた用語を4つのタイプに分け、タイプの使用頻度と成績の関連を調べた。その結果、授業に直結した用語や学生が全般的に良く用いる用語の使用頻度は成績との相関はほとんどないこと、授業テーマに関連した周辺用語や特定の学生のみが用いる用語の使用頻度は成績との相関が正であるという結果が得られた。その結果を踏まえ、相関の程度を反映させた重みにより使用タイプの使用頻度割合から成績を推定した結果、相関係数0.43の精度で成績推定できた。

3) これまで行ってきた図書館データや授業データ解析の内容を概観し、その結果得られた知見や、そのような知見を得るために用いられた解析手法、さらにそのような解析手法の開発方法論を踏まえ、大学が持つ様々なデータ解析に適用することにより教育機関としての大学のIR（機関研究）に資することが可能であることを主張した。

2. 留学生の図書館利用に関するニーズ調査・分析（堀・斎藤）

留学生のニーズ把握のために、留学生の図書館利用データ（入館履歴・貸出履歴）の分析や、留学生への意見聴取を行い、25年度に実施した「留学生の図書館利用に関するアンケート調査」の結果とあわせて、「留学生の図書館利用に関する調査報告」（平成27年3月）を取りまとめた。本報告書については、本学の国際交流専門委員会（平成27年6月3日開催）にて報告した。

4 資料保存に関する調査研究

室員	三輪 宗弘（附属図書館付設記録資料館教授）
職員	原賀可奈子（資料整備室雑誌情報係）
	羽賀真記子（資料整備室図書目録係）
担当窓口	小柳 貴俊（利用支援課資料サービス係長）

<研究開発の概要>

本学が所蔵する資料の保存・管理体制に関する調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 生物被害の調査と対策

前年度に引き続き、シバンムシを中心とした生物被害の調査および対策を実施した。

試行段階を経て手順が確立した作業について、研究開発室としての取り組みから図書館の日常業務へ移行した。

[調査]

- ・前年度同様にトラップ調査および温湿度調査を実施（中央図書館、伊都図書館（温湿度調査のみ））

- ・芸術工学図書館・筑紫図書館の現状調査（9月）

[対策]

<環境整備>

- ・忌避剤設置（中央図書館貴重書庫：6月）
- ・昆虫侵入防止のためのドアブラシを設置（中央図書館・文系合同図書室貴重書庫）
- ・空調機内でのカビ繁殖防止のため、紫外線殺菌灯を設置（伊都図書館開架集密書架・自動書庫：3月）

<殺虫処理>

前年度から検討していた殺虫方法のうち、比較的容易で、安価かつ安全に実施できる低温殺虫法を採用することとし、専用の冷凍庫を導入した。

26年度は試行期間とし、廃棄予定資料での実験の後、文系合同図書室の洋装本を中心に、35回、約900冊に対して実施した。

2. 田嶋記念大学図書館振興財団助成金による「マイクロ資料保全対策事業」の取り組み

各館室の実務担当者および資料保存班によるチームを組織し、新中央図書館への移転予定であるマイクロ資料を対象とし、下記の通り、「新中央図書館への移転に向けてのマイクロ資料保全対策事業」を実施した。

1) 現有マイクロ資料状況調査

対策の検討に先立ち、現有資料の調査及び劣化資料の緊急対策を実施した。

(1) 一次調査：基本情報（請求記号、資料番号、タイトル、数量）、包材の素材、酢酸臭の有無とその程度の調査

(2) 緊急対策：酢酸臭の強いものの隔離、包材の交換等の緊急処置、キャビネットにガス吸着剤や除湿剤を設置

(3) 二次調査：フィルムベース（TAC/PET）、遊離酸度、種類（ネガ/ポジ）の調査

2) マイクロ資料保存対策方針の策定

調査により全容を把握した後、とるべき対策の選択と優先順位付けの検討をおこない、「マイクロ資料保存対策方針」を策定した。

3) 保存対策方針に基づく判断

マイクロ資料保存対策方針に基づき、劣化フィルムについて、複製（マイクロ複製/デジタル化）を行うか、廃棄処分を行うか、原形のまま保存するかを決定した。

4) 対策の実施

3)の決定に基づき、マイクロフィッシュ保存箱の製作・マイクロフィルム箱の購入・入れ替え作業、ガス吸着剤等の入れ替えをおこない、現有フィルムの巻き直しの継続的な実施を開始した。

また、消耗品の年間経費の算出をおこない、今後の継続的な資料及び保存環境のメンテナンスが可能となるようにした。

3. 大学の世界展開力強化事業への協力

法学研究院からの依頼により、大学の世界展開力強化事業「スパイラル型協働教育モデル：リーガルマインドによる普遍性と多様性の均衡を目指して」のプログラムの一環として、九州大学生および海外学生を対象とした資料修復のワークショップを開催した。

4. 職員への研修

革装本のレッドロット対策として、ヒドロキシプロピルセルロースの作成および塗布作業のマニュアルを作成し、一連の作業の説明会を実施した（中央図書館・文系合同図書室）。

説明後は、各館室において日常業務の一環として取り組んでいる。

5. 田嶋記念大学図書館振興財団助成金への申請

新図書館移転に向けての資料保存対策として、田嶋記念大学図書館振興財団助成金へ「キャンパス移転に

に向けた移転対象資料のカビ被害対策事業」の助成金を申請し、採択された。本事業の取り組みは27年度となる。

6. 今後の予定

- ・田嶋記念大学図書館振興財団助成金採択に伴うカビ被害資料の保全対策
- ・移転に向けた継続的な環境整備（清掃等）
- ・各書庫のトラップ調査及び温湿度調査の定期的なデータの整理・分析

5 学習・教育支援に関する調査研究

室員	吉田 素文（附属図書館副館長，医学研究院教授）
	富浦 洋一（システム情報科学研究院教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	井上 仁（情報基盤研究開発センター准教授）
	山田 政寛（基幹教育院准教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
職員	北島 光朗（情報システム部情報基盤課）
	井川友利子（伊都地区図書課企画運営係）
担当窓口	渡邊由紀子（利用支援課長）

<研究開発の概要>

九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組み（吉田，井上，山田，職員）

附属図書館とその付設教材開発センターおよび統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が一体となり、平成25～26年度「教育の質向上支援プログラム（Enhanced Education Program : EEP）」に採択された「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組みを推進した。

本取り組みは、附属図書館がこれまで構築してきた学術情報基盤を最大限に活かし、基幹教育院等の関係部局との連携を深めつつ、アクティブ・ラーナーの育成に貢献することを目的としており、平成26年度は、主に以下の事業を実施した。

1) 学生との協働による学習支援プログラムの充実と発展

平成25年度に引き続き、中央図書館、伊都図書館、嚶鳴天空広場、医学図書館に図書館学習サポーター（Cuter）を配置した。Cuterは、図書館職員との協働により、学習相談デスク、学習ガイド作成、レポートの書き方講座の講師、交流会の実施等、多様な学習支援活動を展開した。さらに、Cuter育成プログラムの開発に向けて、Cuterの業務内容を分析し、Cuterと図書館職員に必要とされる能力、および、Cuterの各能力の習得時期を明確化した。

2) 自律的学修支援を推進する人材開発

本学の附属図書館職員を対象に、学習支援スキル向上を目的とした研修会を平成27年1月22日および平成27年3月3日の2回にわたって開催した。参加者数は延べ26名であった。また、学内外で開催されるシンポジウムや講座に本取り組みの担当者が参加し、学習支援に対する意識および技能の向上を図った。

3) 基幹教育との連携

基幹教育院の教員と連携し、基幹教育カリキュラムの進行に応じ「レポートの書き方講座」，「1年生向けプレゼン講座」を実施した。300名以上の1年生が参加し、これらの講座が学生のニーズに合致したものであることが確認できた。平成25年度に伊都図書館内に設置した「課題文献コーナー」については、平成26年度

後期から、対象とする科目の範囲を課題協学科目に加えて基幹教育全科目に拡大した。さらに、基幹教育院発行の冊子『アクティブ・ラーナーへの第一歩』を基幹教育院の教員と共同で執筆・編集した。

4) 効果的な学修支援を推進するための各種調査

本取り組みの担当者3名が平成27年3月下旬に北米の大学図書館を訪問し、施設見学および現地の教職員と意見交換を行った。また、同訪問に引き続き、本取り組みの担当者2名がポートランドで開催された米国大学・研究図書館協会の2015年大会において、学習支援等をテーマとしたセッションに参加し、情報収集を行った。

5) 電子教材の拡充と利用促進

平成25年度に開発した図書館活用に関するゲーム教材について、モニタリング調査、遅延調査を実施し、その有効性を確認した。また、LibGuidesに新たに34件のガイドを追加し、全体で81件のガイドを提供した。ガイド全体で学内外から合計14万回を超えるページビューがあった。

6) ライブラリーサイエンス専攻における教育・研究との連携

本学のピアサポートの現状、各専攻教育のカリキュラムマップ、Cuterの活動内容の分析等をもとに、学生協働と図書館の係わりに関するグラウンドデザインをまとめた。また、ライブラリーサイエンス専攻の科目「レファレンスサービス論」において、LibGuidesを使ったパスファインダー作成実習を実施した。

7) 成果の逐次発信

上記の成果については、ウェブサイト (<http://eep.lib.kyushu-u.ac.jp/>) により外部に向けて随時情報を発信するとともに、学会や講演会等で積極的に発表を行った。

8) 評価の実施

上記の項目ごとに月次で進捗確認を行い、年度末には、達成状況の点検・評価および今後の課題抽出を行った。

2. 学習支援を目的とした調査研究（池田）

学習支援を目的として、主に以下の調査研究を行った。

1) 研究室所属の学生と共に、高校数学の特定の問題に対し、アンケートを用いた誤概念と概念間の遷移について調査し、ヒントの出し方やもともと持っていた概念によって遷移先の概念が異なることなどが確かめられた。

2) 小学生から大学生まで、それぞれの知識に応じた「情報」の授業ができるように、フーリエ変換を簡易化した教材(iPad 上のアプリを含む)を構築し、実際に小学生、高校生に 90 分程度の模擬授業を行った。

3) 授業中の受講者からのフィードバック収集を目的に、授業中における受講者のビデオ撮影や研究室自作の掲示板を授業で用い、データを蓄積し、動画フォーマットの変換方法調査などを行い、今後の動画解析に向けた準備を行った。

3. 機関リポジトリを活用した大学別発信型語彙リストのオーダメイド作成法（富浦）

英語の確実な運用には、基本的な語彙や表現の習得が欠かせない。学術語彙や表現は、一般目的の英語のそれに比べ大きく変わることが知られており、その収集が重要な課題となっている。実際には、大学などの機関単位でも、取り扱っている研究領域や教学・研究組織が異なることから、究極的には各機関で整備されることが望ましい場合もあり、実際にいくつかの大学ではそういった資料が出版されている。しかし、それには大変な労力を要する。

本研究では、近年、主要研究機関が構築しつつある機関リポジトリを、そういった資料を作るための基本的な言語資源として捉え、効率よく作成するための枠組みを研究・提案している。

平成26年度は、大学等の機関リポジトリから得られる部局別英語論文から、個人の語彙分布に基づいて、当該機関に関連する重要語彙を組織構造・階層に応じて自動生成する方法を提案し、実際に、九州大学機関リポジトリを活用し、重要語彙リストを試作した。

6 教材開発および著作権処理に関する調査研究

室 員 岡田 義広（附属図書館付設教材開発センター教授）
吉田 素文（附属図書館副館長，医学研究院教授）
井上 仁（情報基盤研究開発センター准教授）
担当窓口 古賀 幸成（図書館企画課専門員）

<研究開発の概要>

インストラクショナルデザインに基づいた教材，教育方法の研究開発と，教材作成にかかる著作権処理問題について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 部局と連携した3D教材開発

前年度開発したWebGLを用いた3DCGコンテンツ閲覧システムやAR(Augmented Reality, 拡張現実感)技術を用いたサンプル教材を活用した電子教材開発を実践すべく講習会等を実施した。特に，文系地区における電子教材開発を進めるべく，文系地区教員との教材開発に関するミーティング等を実施し，日本史学（宮中儀礼）に関する対話型Web教材の開発を進めた。また，言語文化研究院と連携して，ディベート教育用Webコンテンツと英単語学習用Webコンテンツの開発を進めた。さらに，基幹教育院と連携した電子教材開発を進めるべく電子教材開発に関する説明会や「英語で学ぶ教育を実践するための英語教材開発」のための英語教育セミナーを実施した。

2. 学生協働の医学教材開発

平成24～25年度に採択され実施した九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)の「病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築」の事業内容を継続して行い，医学科目（解剖学）の3D教材開発を実施した。ゲーム要素を取り入れ，当該の科目に対して興味を沸かせ，自学自習を動機付けるような教材コンテンツを学生と教員の協働作業により開発した。モニター学生の学習試行によりその有効性評価[3, 4]を行った。また，九州大学基金助成事業の支援を受けた「医学の歴史に関する電子教材の開発」事業を学生と教員の協働により進めた。

3. 図書館利用学習のための電子教材開発

平成26年度教育の質向上支援プログラムで，附属図書館主導で実施されている「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組みの一環として，大学図書館の利用方法を自律的に学習できる教材として「図書館をめぐる冒険～館内に散らばる謎を解け！～」と題したスマートフォンアプリを研究開発した。本電子教材では，学習者のモチベーションの向上・維持をデザインするための一つのモデルであるARCS(Attention-Relevance-Confidence-Satisfaction)モデルに基づいたデザインを教材の内容に取り入れ，学習者が図書館のサービスを体感しながら学べるゲーミフィケーション要素を導入した。その結果，スライドと音声ガイドによる別の図書館利用学習用e-learning教材と比較した学習効果の測定実験において，学習者のモチベーションに関する点において有意な効果があるという結果が得られた。

4. 教材開発に係わるその他の取り組み

講義ビデオ撮影編集公開およびICTを活用した3D教材開発の前年度までの取り組み内容をまとめて論文発表した。「国立大学改革強化推進補助金」により教材開発センターが導入した2D/3D教材開発システムを使用してICTを積極的に活用した電子教材開発を推進するためのホームページ整備を行った。

5. MOOCの開講

MOOC (Massive open online courses : 大規模公開オンラインコース) は，インターネット上で無料で受講でき，一定の基準を満たせば修了証が発行される，開かれた講義である。教材開発センターでは，平成26年度からMOOCの制作，開講の取り組みを開始した。平成26年度は，溝口孝司教授（比較社会文化研究院），Claire Smith教授（フリンダース大学，九州大学アジア太平洋未来研究センター訪問研究員）を講師として「Global Social Archaeology (グローバル社会考古学)」の制作，開講を行った。本講義の制作上の特色として，映像コ

コンテンツを教材開発センター所有のスタジオで独自に制作したことがあげられる。これにより、制作スタッフと講師の密な連携が可能となった。また、グローバルな受講者を視野に入れ、全編英語での講義とし、日英字幕を付けたことも特色である。講義は、平成26年9月25日から10月23日まで、JMOOC公式プラットフォームOpen Learning, Japanから開講された。開講期間中の受講登録者数は、日本を含め世界53ヶ国、799名にのぼる。このうち222名が修了しており、これまでJMOOCで開講された講座でもトップクラスの修了率(27.8%)となった。

6. 電子教材著作権処理に係る取り組み

録画した講義や学習資料等を電子教材としてウェブで共有したりネット配信するとき、教材に「他人の著作物」が含まれていると、著作権への配慮が必要となる。教員が作成した電子教材の授業利用やネット配信する際の著作権処理の考え方等を共有する目的で、電子教材著作権講習会(全学FD)の積極的開催、及び外部講師を招聘して著作権セミナーを2回開催した。また、大学の学習、教育における電子的学習資源の製作および共有化を促進させる体制の構築と著作物の円滑な利用環境を整備し、我が国の高等教育・学術研究の発展に寄与することを目的に、平成26年5月1日に設立された「大学学習資源コンソーシアム(CLR: Consortium for Learning Resources)」(本学代表者は、吉田素文室員)に参加し、そのもとに設置された特定の事項を検討する4つのワーキング・グループの1つである、活用ガイドラインWG(利用者側によるガイドライン作成及び啓蒙活動について検討)は、吉田室員が主査をつとめ、ガイドラインの作成方針等について検討を進めた。

7 コンテンツ形成に関する調査研究

室員	川平 敏文 (人文科学研究院准教授) 中里見 敬 (言語文化研究院准教授) Wolfgang Michel (附属図書館研究開発室特別研究員) 三輪 宗弘 (附属図書館付設記録資料館教授)
職員	山根 泰志 (図書館企画課企画係) 室井 万穂 (利用支援課資料サービス係) 相部久美子 (医学図書館閲覧係) 梶原 瑠衣 (医学図書館参考調査係) 宮嶋 舞美 (情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当) 古賀 京子 (伊都地区図書課参考調査係)
担当窓口	久原 明美 (資料整備室長, 図書館専門員) 諸岡 静児 (文系合同図書室長, 図書館専門員) 井ノ上俊哉 (医学図書館専門員) 星子 奈美 (eリソースサービス室リポジトリ係長)

< 研究開発の概要 >

九州大学が所蔵する貴重資料、コレクション等について、その由来や内容、価値等の調査を行うとともに、その画像及び書誌データベース作成についての調査研究を行う。

< 研究開発の内容 >

1. 雅俗文庫目録の公開

21年度及び22年度に受け入れた中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」について川平敏文室員の指導のもと、人文科学研究院の教員・大学院生とともに、26年度も継続して書誌情報の採取・データ入力を実施した。書誌採取の済んだものについては「九大コレクション」で簡易目録を公開している。また、図書館システムへの登録作業を開始し、登録の済んだものについては、より詳細な書誌情報、所蔵情報の提供が可

能となっている。

27年度の開学記念行事で予定されている貴重文物展示（雅俗繚乱—中野三敏 江戸学コレクションの世界—）開催のため、図録の製作準備等を行った。

2. 濱文庫所蔵唱本目録作成

本研究班では、濱文庫所蔵唱本について詳細な冊子体目録を作成しながら、将来的に電子目録を公開できるよう、フォーマットに則りデータ等を蓄積している。その成果は紙媒体以外に、九州大学学術情報リポジトリでも公開し、学内外へ広く発信している。

今年度は、「濱文庫所蔵唱本目録稿（十二）」を『九州大学附属図書館研究開発室年報』2013/2014に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（十三）」を『言語文化論究』第33号に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（十四）」を『言語科学』第50号にそれぞれ掲載し、濱文庫所蔵の唱本1125冊の目録作成を完了した。今後は索引を付して、一書とする予定である。

3. 医学図書館所蔵コレクション・文庫調査、情報発信強化

中央図書館、医学図書館に分散している大森治豊旧蔵本調査を行い、図書原簿記載の155部613冊のうち、約3分の1の所在を確認し、目録整理した。大森治豊は、福岡医学校校長、京都帝国大学福岡医科大学初代学長兼附属医院長を歴任し、九州大学の基礎を築いた学祖の一人である。そのため、この旧蔵本は医学史、大学史において価値の高いコレクションとなり得ることが期待される。また、この調査過程で、歴代医学部教員や卒業生の旧蔵本、個人文庫など、価値ある未知の資料を発見した。これらも順次目録整理している。

上記のようなコレクション・文庫に関する情報発信強化のため、図書館ウェブサイトの医学図書館所蔵コレクションに、大森治豊文庫、小川文庫、宮入文庫、眼科学教室貴重書、杏仁医館文庫、ショイベ文庫、古医書のページを新規追加した。今後、他のコレクション・文庫に関しても情報発信していく予定である。なお、大森治豊旧蔵本については、『大学文書館ニュース』第39号（2015年）に報告を掲載予定である。

8 学術情報の流通および発信に関する調査研究

室 員	馬場 謙介（附属図書館研究開発室准教授）
	吉田 素文（附属図書館副館長、医学研究院教授）
	荒木啓二郎（システム情報科学研究院教授）
	竹田 正幸（システム情報科学研究院教授）
	富浦 洋一（システム情報科学研究院教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	田中久美子（システム情報科学研究院教授）
	廣川佐千男（情報基盤研究開発センター教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
職 員	林 豊（eリソースサービス室リポジトリ係）
担当窓口	星子 奈美（eリソースサービス室リポジトリ係長）

<研究開発の概要>

九州大学が蓄積する学術情報資源をより効果的に発信するために、学術情報リポジトリ（QIR）等の発信機能の高度化、システム間連携、検索システムに関する研究開発を行う。

<研究開発の内容>

1. 組織内の共同研究の可能性のある研究者対の抽出（富浦）

前年度に引き続き、QIRに登録されている論文データを利用した共同研究の可能性のある研究者の組を抽出する手法に関する研究を行った。具体的には、利用しているトピック分析手法の高速化を図った。

2. オープンデータ及びオープンサイエンスに関する研究（池田）

以前は機関リポジトリやそのログ解析を主に行ってきたが、オープンデータやオープンサイエンスの流れを受けて、(1) 科学データの蓄積と (2) 科学データからのe-Science（特定分野の知識を用いずデータを機械学習等の手法で処理することで科学的な知見を得ようとするもの）の取り組みを行った。

1) データ基盤の準備として、データを単語ベクトルとして表現することで、分野を越えたインフラができるという仮説をたて、これを検証する目的で、図書館情報学分野の科学研究費補助金（基盤研究（B））へ申請した。また、オープンデータの取り組みを行っているRDA（Research Data Alliance）の会合に出席し、情報収集を行った。

2) 主に超高層地球物理の分野のデータを用い、オーロラの予測を行った。